The Whisper from Amherst

エミリィのささやき

小石といえば、路傍の石、見捨てられたイメージが強いですが、エミリィは多くの詩で、「小さい」とか無(nothing)、無名(nobody)こそが自由に純粋に生きる力になると語っています。人や馬車に踏みつけられたり、跳ねられたりするたびに、あっちに跳び、こっちに転がっている小石(rambling stone)も、「なんて幸せなんだ」と言っています。

エミリィは、自分を無名(nobody)であると決めつけることによって、かえって存在の自由や自由な生き方を確保しようとしており、心から無名な小石になりたいと願っていたわけではありません。でもそこがエミリィの個性であり、魅力なのだと思います。

‘How happy is the little Stone’

How happy is the little Stone	小石はなんて幸せなんだ
That rambles in the Road alone,	道路に独り　ころがって
And does’nt care about Careers	仕事(キャリア)のことも気にかけず
And Exigencies never fears —	衣食住こと欠くも恐れず
Whose Coat of elemental Brown	その天然の茶色の上衣(コート)
A passing Universe put on,	通りがかりの宇宙が着せた
And independent as the Sun	ひとり立ちして　太陽(おひさま)のよう
Associates or glows alone,	仲間と和すも　独りっきりで輝くも
Fulfilling absolute Decree	さりげなく　素朴(シンプル)に
In casual simplicity —	天命を果たしつつ

(注-ディキンスンは“does’nt”と書いているが“doesn’t”が正しい)

(思潮社「エミリ・ディキンスンを読む」岩田 典子 著)